

千鳥ヶ淵戦没者追悼式に寄せて

73回目の8月15日がまたやって参りました。

こうやって千鳥ヶ淵に眠る、名前を奪われ、個人の歴史や故郷まで奪われた皆さんは、今日の日本が多く犠牲の上に戦後手にした憲法の下、「平和な世界を築くために日々努力すること」を誓った姿とはどんどん遠ざかっていることを案じ憂えておられるやもしれません。

今という時代を、再び戦争という禍が起こされるかもしれない、そんな危機感を持って過ごしておられる方々は、日本の国内にも海外にも決して少なくはありません。あの大战を経験され、老いや病の身を静かに横たえる日本のご高齢者も、ヨーロッパ各地でも、また日本の侵略の傷跡が残るアジアの国々でも、再び歴史の歯車が狂い始め、愚かな核戦争すら起こしかねない指導者や国家、或いはテロと呼ばれる勢力のあることを感じています。またそうした不穏な情勢とともに、世界の各地で移民への排外主義やヘイトスピーチが公然と行われるようになり、歴史に学ぶ機会を持たなかった若者はそこへ吸い寄せられていきます。

今、最も大切なことは「歴史に学ぶ」ことを築きなおすことではないかと思えます。そうでなければ、あの5000万人とも8000万人とも言われる犠牲者を出した第二次世界大戦を最後の世界戦争として、また広島に続く長崎への原爆投下による犠牲者を最後の被爆者とすることは出来ないと思います。

果して日本では戦争に向かう歴史はどう語り継がれ、記録されているのか、歴史をドキュメントとして残すことに傾注されている作家の保阪正康さんの言葉に「記憶を母とし、記録を父とする」というのがありますが、まさに母なる記憶はそれを経験した方々の生命とともに失われ、大切な記録、公文書は敗戦を前に当時の内務省令によって焼却・廃棄されました。この国会で森・加計問題として取り上げられた公文書の改ざん、隠蔽、廃棄は権力を持つものにとって都合な真実をそうやって消し去ってきた事実とびつたり重なります。公文書が国民の歴史であることは戦前も戦後も国民を主権者とする立憲主義の立場からも当然のことであり、主権在民を掲げた戦後の憲法下にあっては尚更です。

私ども立憲フォーラムは主権者国民による政治を第一に、安易な憲法改正ルールの変更にも、また主権者国民の歴史を消す公文書改ざんにも全力で闘い、また安倍総理による憲法改悪に闘い抜いていく覚悟です。

8月8日沖縄県知事として辺野古への新たな基地建設に全身全霊をかけて闘ってこられた翁長知事をご逝去されました。沖縄戦で県民の三人に一人を失った歴史に、平和を希求する沖縄の心はひとつ、そう言い続けた翁長知事に学び、ともに心をひとつに戦後73年を新たな大戦の序章とさせないためにも闘ってまいります。

本日の慰霊の日にあたって、その決意をお伝えするとともにここに眠る御霊の安らかなることを心から祈ります。

2018年8月15日

立憲フォーラム